

人間行動学科 地理学コース

沖縄県沖縄市旧コザ地区における「基地の街の記憶」と地域解釈

文学部

卒業年度 平成 20 年度

学籍番号 B04LA027

つじの なほ
辻野 菜穂

目次

I はじめに	・・・ 3
II 調査地と調査方法	
1) 沖縄市	・・・ 4
2) 旧コザ市	
(a)概要	・・・ 4
(b)ゲート通りと中央パークアベニュー	・・・ 5
3) コザをめぐる状況	・・・ 10
4) コザの対外的イメージ	・・・ 11
5) 調査方法とインフォーマント	・・・ 13
III 調査結果と考察	
1) 聞き取り内容	・・・ 14
2) 考察	
(a)内と外の差異	・・・ 20
(b)内側での差異	・・・ 22
3) 記憶を残した通り／消そうとした通り	・・・ 26
IV おわりに	・・・ 27
謝辞	・・・ 29
注釈	・・・ 29
参考文献	・・・ 30
参考 URL	・・・ 30
キーワード: 沖縄市 コザ 基地の街 記憶 地域個性 アイデン ティティ	

I はじめに

沖縄県沖縄市旧コザ地区（以下コザ）は、1950年代以降「基地の街」として成立・発展を遂げた街である。1972年の日本復帰や1974年に行われた美里村との市町村合併以降もその姿を保ち続け、現在においても「基地の街コザ」は沖縄市の地域アイデンティティの中核を成すものとなっている。

しかし日本復帰から30余年が経過した現在、基地依存経済の衰退と共に街は衰退の一途を辿り、基地の街の面影は徐々に薄れつつある。

そんな中、沖縄市は2005年に戦後文化資料館「ヒストリート」を市内中心部¹に開設した。ヒストリートは生活雑貨や街並みの写真、ポスターなど、戦後からコザが最も「基地の街」であった時期にかけての街の記憶を視覚的側面から保存・展示した資料館であり、コザの戦後文化を地域個性として再評価し、街づくりに生かしていくという理念の下に運営されている。

コザの戦後文化は、自然資源や歴史資源を持たない沖縄市にとって唯一の地域資源であり、同時に他市町村にはない独自の魅力を持った強烈な地域個性である。それはコザが基地の街であったからこそ花開いた文化であり、言い換えれば「基地の街であるということ」がコザの地域個性であると言っても過言ではない。しかし米軍の統治下で生まれたその個性が、統治から離れ、月日が経過してゆくにつれて徐々にその鮮明さを失うのは必然であり、「基地の街であるということ」は「基地の街であったこと」へと変化してゆく。現在もコザは間違いなく「基地の街」であるが、しかしかつての激しい色彩を次第に失っている事は紛れも無い事実である。

そこでコザに住む人々の持つ「コザが基地の街であった頃の記憶」が重要な意味を帯びてくる。失われつつある場所の独自性を補完するものこそが、居住経験の中から人々が育んできた「基地の街の記憶」である。しかしこの「基地の街の記憶」もまた、歳月の経過と世代の変化に伴い、徐々に変化し、最終的には薄れていくものである。そのような状況の中で、ヒストリートは「モノに宿る記憶」を通じて、目に見えない「基地の街の記憶」を可視化し、世代を超えて受け継がれていく形で発信していく事で、コザという街の地域個性を明確な形で提示すると同時に、そこに住む人々の地域に対す

る解釈を再構成しようと試みているのである。

本稿では、コザに住む人々による地域解釈とはどのようなものであり、それは外部に向かって発信される対外的なコザのイメージとどう比較されるか、人々が地域を解釈する際に影響をもたらすものが何であるか、「基地の街の記憶」はそこにどう関わっているのかを明らかにしたいと思う。

II 調査地と調査方法

1) 沖縄市

沖縄市は、沖縄本島中部、東海岸側に位置する県内第二の規模を持つ都市である。人口 133.755 人を有し²、面積は 48.99 平方 km³ であるが、その約 36% が軍用地（嘉手納飛行場ほか）として使用されている。

古くから「エイサー」と呼ばれる琉球舞踊や民謡などの伝統芸能、民芸品・絵画などが盛んな地域としても知られている。産業に関しては第 3 次産業従事者が最も多く、沖縄県の統計調査によると、市民全体の約 78% が第 3 次産業に従事している。

元々はコザ市と美里村という二つの地域に分かれていたが、1974 年に行われた両地域の合併により、沖縄市となった。

2) 旧コザ地区

(a) 概要

旧コザ地区は、現在の沖縄市の胡屋地区を中心とした区域に相当する。美里村との合併により 1974 年に沖縄市となるまでこの地区は「コザ市」という一つの独立した市であった。戦前は「越来村」と呼ばれる農村であったが、沖縄戦において上陸した米軍によって建設された難民収容施設「キャンプ・コザ」を中心に、1950 年代から米軍要員を対象とした飲食店や商店、質屋、バー、ライブハウスが軒を連ね、市街地が形成された。その後、1956 年には正式に「コザ市」となっている（波平 2006, pp.23）。

嘉手納飛行場と隣り合わせという立地において、「基地の門前町」として戦後急速な経済発展を遂げ、ベトナム戦争の時代にはその特需により、市経済の全体の約 80% が基地関係からの収入であったと言われている。

特に嘉手納飛行場第2ゲートに隣接した「コザゲート通り」と「センター通り」（現在は中央パークアベニュー）という二つの商店街においてその隆盛は甚だしく、多数のバーやクラブなどによって歓楽街が形成され、翌日には戦地へ向かう／或いは戦地帰りの軍人が大金を持って街へ繰り出し、豪遊し騒いでいくといった場面が日常的に繰り返された。その様子は「一晩でドラム缶一杯にドル札がたまる」と喩えられたほどであった。

そのような狂騒とも言える状況の中で生活を送っていた当時のコザの人々にとって米兵とは重要な商売相手であったが、同時に沖縄は米軍の統治下という状況に置かれており、それはコザも例外ではなかった。米軍要員による交通事故や婦女暴行といった犯罪の横行と相次ぐ無罪判決など、常に住民は不平等な立場を強いられていた。1970年に勃発した「コザ暴動」⁴は、それまで抑圧されてきたコザの人々の鬱積を象徴する事件と言える。

そうした歴史の中で「基地の街コザ」は独特の文化を展開させてきた。英語表記の看板やネオンを纏った異国情緒漂う街並み、アメリカと沖縄、そしてインドや中国を始めとした他国籍の文化が入り混じった文化である「チャンプルー文化」、ライブハウスで花開いたオキナワロックやジャズ、フォークを中心とした音楽文化は現在も沖縄市の独特の文化として特徴づけられている。

合併により沖縄市となってから、「コザ」という地名は地図上には存在しないが、かつてコザ市であった場所は未だに「コザ」という名称が使われており、コザという街が持っていた存在感と、人々の愛着を窺い知る事が出来る。

(b)ゲート通りと中央パークアベニュー

上述のように、「コザゲート通り」（以下ゲート通り）と「中央パークアベニュー」は「基地の街コザ」を代表する商店街である。

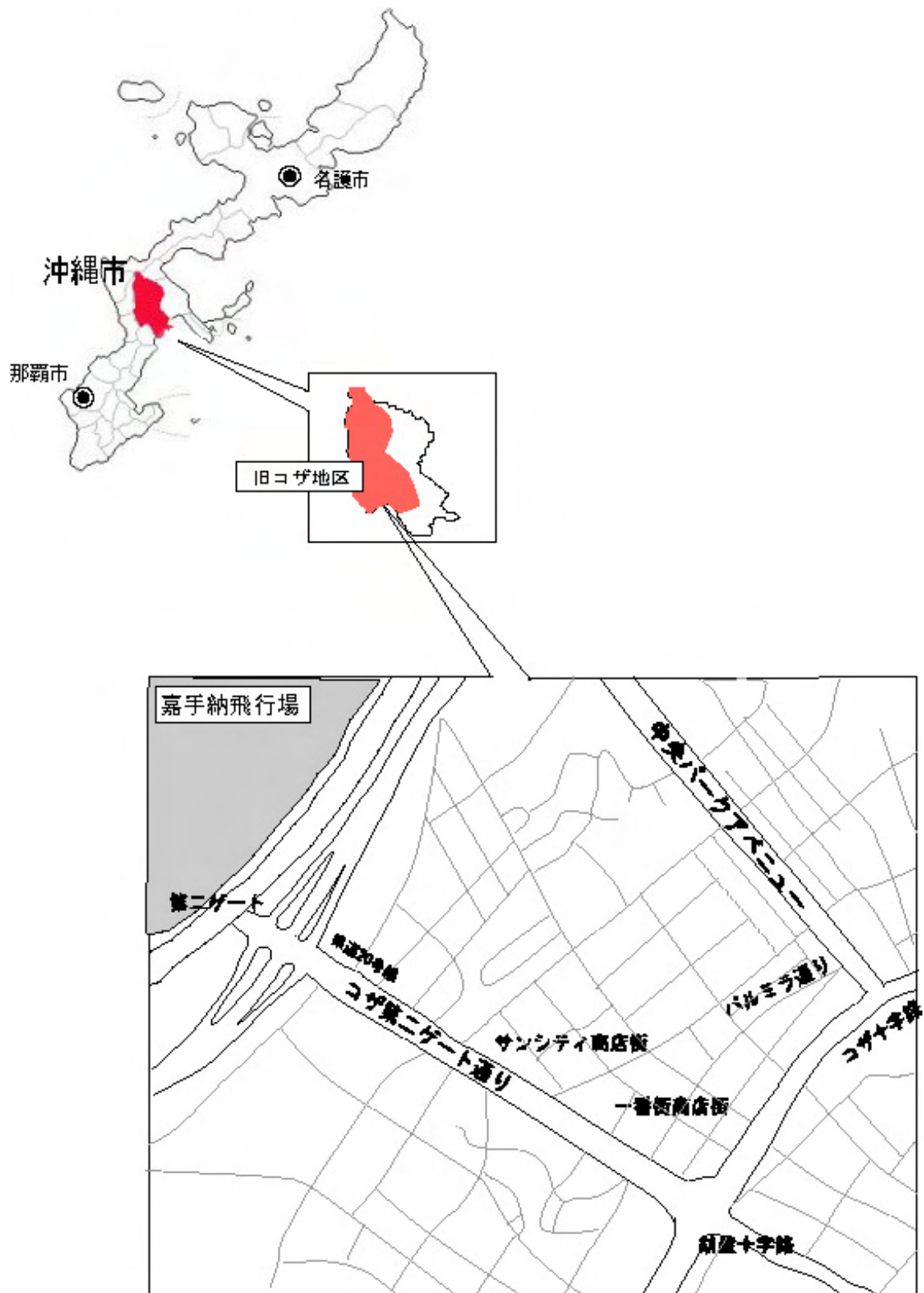
ゲート通りは、嘉手納飛行場第二ゲートから伸びる県道20号の両脇に沿う形で、全長約500mに100店舗あまりの商店・飲食店・質屋・ライブハウス・クラブ等が軒を連ねている。米軍要員を顧客対象とした商店や英語で表記された看板、煌びやかなネオンは戦争特需時代の面影をそのまま残し、現在も「基地の街」のイメージを残す場所としてコザの最もポピュラーな観光名所となっている。

1972年に「空港通り」という新たな通りの名前が打ち出された

が、2005年には再び「ゲート通り」へと統一された。通り名の改名の経緯については後述する。

中央パークアベニューはかつて「(ビジネス) センター通り⁵⁾」と呼ばれた商店街である。ゲート通りから北へ約300mの場所に立地しており、こちらもゲート通り同様、飲食店・商店などが連なり、朝鮮戦争・ベトナム戦争当時には著しい経済発展を遂げた。1985年にアーケードの敷設を行うと共に「中央パークアベニュー」へと改名し、現在に至っている。

尚、同地区においてはこの二つの商店街の他にも、「沖縄市一番街商店街」「沖縄市サンシティ商店街」「パルミラ通り」「銀天街商店街」などの商店街が存在するが、これらの商店街は主に地元住民を顧客対象とした商店が立ち並んでおり、ゲート通りや中央パークアベニューとは異なる様相を見せている。



【図 1】 調査地の立地と嘉手納飛行場との位置関係
 沖縄県立図書館 ホームページ内沖縄素材集および沖縄市（2006）
 より作成



【写真 1,2】 コザゲート通り



【写真 3】 中央パークアベニュー



【写真 4】 沖縄市一番街商店街



【写真 5】 パルミラ通り



【写真 6】 沖縄市銀天街商店街

写真 1 から 3 は 2009 年 3 月 12 日
4 から 6 は 2007 年 9 月 6 日
筆者撮影

3) コザをめぐる状況

上記のように基地の門前町として隆盛を誇ったコザであったが、日本復帰を契機に徐々に衰退を迎える事になる。その要因としては、日本経済への移行に伴い日本円が著しく高騰した事による基地経済の衰退やバブルの崩壊、2000年に改正された大店立地法による郊外型大型店舗の台頭などに加え、居住人口の減少、高齢化による商店街の後継者不足、観光産業振興政策の遅れなどが挙げられる。

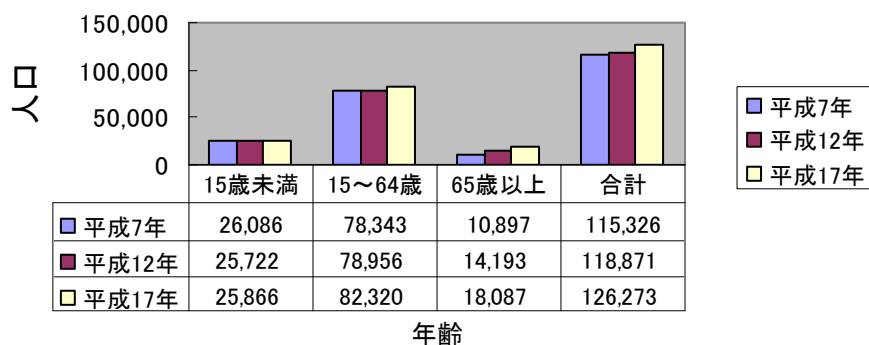
郊外型大型店舗の台頭に関しては、沖縄市は北谷町のハンビータウン（サンエー）6・アメリカンビレッジ（ジャスコ）、ショッピング泡瀬（ダイエー）、具志川ジャスコなど、周辺市町村に存在する大型小売店に周囲を取り囲まれており、またこれらの店舗が県内の主要幹線道路の要所ごとに存在するために買い物客がそちらへ流れてしまい、沖縄市まで到達しないという状況にあるという。

居住人口の減少と高齢化に関しては、統計データを見る限りでは沖縄市の人口は近年増加の傾向にあるものの、年齢別に見ると高齢者の人口が僅かずつではあるが増加しつつあることが伺える。（図2）店主の高齢化に伴い、時代と消費者のニーズに機敏に対応する事が困難となり、新規の顧客を獲得する事ができない、あるいは閉店してしまう商店が相次ぐことで商店街が空き店舗が目立つ「シャッター通り」となってしまい、商店街全体の活気が下がっていくという結果になってしまっていると考えられる。

観光産業振興政策については、沖縄市観光協会で行った聞き取りによると、沖縄市の入域観光客数は近年微増傾向にあるものの、例年沖縄県全体の約0.5%程度であり、また観光客の増加を目的とした政策もこれまで行われてこなかった、という事であった。そもそも1980年代まで米軍要員を顧客対象とした商売のみに特化していた為に観光による経済振興への関心が極端に低かった事に加えて、近年の「沖縄ブーム」に見られるような「青い空・青い海」といったリゾートに重きを置いた沖縄県の観光政策に便乗できる自然資源や、戦跡などの歴史資源が沖縄市にはなく、また北谷の美浜タウンリゾート⁷のような強い集客効果のある施設もない。「基地の街」を根底とした独特の街並みやライブハウス、飲食街など、コザ独自にして最大の魅力である文化に関しても、ソフトの充実に対してハード面での施設の誘致を行ってこなかった事やモータリゼーションへの対応の遅れなどにより、十分な集客効果を発揮しきれずにい

るという。

以上のような要因を含んでいる事によって、現在のコザは経済衰退に加え、観光面においても「素通り観光」とも言われ、県内の買い物客のみならず県外からの観光客も他地域に流れてしまっており、中心市街地の空洞化に歯止めが聞かない状態に陥っている。



【図 2】 沖縄市の年齢別人口推移（平成 7 年・12 年・17 年）

沖縄県企画部統計課ホームページデータより作成

4) コザの対外的イメージ

本稿の目的は人々の街に対する解釈という内在的なコザのイメージの検証であるが、その前に、外部へと発信されているコザの対外的イメージにはどのようなものがあるかを確認しておきたい。

対外的イメージを捉える指標として、観光という観点からコザのイメージを抽出したいと思う。

地域の観光イメージの発信先は、他でもなく外部の人間であり、地域をどう見て欲しいかという意図をそこから読み取る事ができるからである。

第 3 項で挙げた要因などから、沖縄市は他市町村に比べ観光地としての側面が弱いのが現状であるが、近年はその独自の文化を観光資源とする動きが活発になりつつある。

2007 年には「音楽による町づくり」をコンセプトとした音楽施設「コザミュージックタウン音市場」が市内にオープンしており、また沖縄市観光協会は市内の様々な観光スポットを紹介する観光

情報マガジン『マングラーズマガジン』を定期発行している。

コザの観光は大きく分けて「音楽」「国際交流都市」「伝統芸能」の3つのキーワードに分類される。『マングラーズマガジン』においても、これら3つのキーワードを中心に特集が組まれており、この3つのキーワードが沖縄市観光の柱を成すものとなっている事が伺える。

オキナワンロック⁸を始めとした音楽文化を根底とし、ライブハウスが多く立地する街並みを生かした「音楽の街」や、アメリカ・沖縄・中国・インドなどの多国籍出身者が居住している地域特性と、米軍要員を顧客対象とした店舗の多さを生かし、「外国で買い物をしているような」体験が出来るといった「国際交流都市」など、「基地の街」としての特性を土台としたキーワードに加え、元々の土着文化である琉球舞踊「エイサー」と民謡を含む「伝統芸能」を用い、沖縄市の「チャンプルー文化」を象徴したものとなっている。

ロックの街、沖縄市のライブハウスをはしごする。	2006年 vol.26
インターナショナルシティの愉しみ	2007年 vol.27
音楽の街・沖縄市コザ総特集	
沖縄市のエイサーを徹底紹介	
音楽のまちコザの新名所“ミュージックタウン”へ行こう！	2007年 vol.29
ロックのまち、コザのライブハウスをはしごしよう！	
48カ国の外国人が居住する街～国際都市 KOZAの魅力にハマる！	2008年 vol.30
オーバー140軒の国際SHOPでプチ異国体験～ドルで買い物体験	
本場のロックスピリッツをライブハウスツアーで体験！	
音楽が息づく街～MUSIC TOWN KOZA詳細MAP	
うた三線にひたる	
エイサーにひたる	

【表1】マングラーズマガジンの特集記事の一例
 沖縄市観光協会発行『マングラーズマガジン』より作成

この3つのキーワードの中でもとりわけ「音楽の街」「国際交流都市」の二つを、「基地の街コザ」の対外的イメージとして今回は取り扱いたいと思う。

5)調査方法とインフォーマント

コザに住む人々がコザをどう解釈しているかを、今回は人々がそれをどう言葉で表現するかという「言語的表象」の観点から検証すべく、聞き取り調査を行った。調査期間は2008年9月5日から9月9日、同年10月6日から10月20日である。調査の際にポイントとしたのは、インフォーマントが、①過去と現在のコザをどのような街であると表現するか②米軍要員をどのようなものとして捉え、受け入れているか、という2点である。

この2点を聞き出す導入として、個人のライフヒストリーを軸として、「ベトナム戦争期のコザはどのような様子であったと記憶しているか」「コザ暴動の時は何歳で、どこに居て、暴動に対し何を感じたか」「合併によりコザ市から沖縄市に名前が変わる事をどう思ったか」「ゲート通りが空港通りに、或いはセンター通りが中央パークアベニューへと名前を変えた時、どう思ったか」以上の4点を基本的に全インフォーマントに質問している。

聞き取り調査は主にゲート通り・中央パークアベニューにて店舗を経営・あるいは勤務している人々を中心に、住民約20名を対象に行った。その中から、特に詳しく話しを聞く事が出来た年齢・年代の異なる9人の事例を取り上げ、彼らにとっての「コザ」とはどのような姿であるか、そこにどのような違いが見られるのかを以下で考察したいと思う。

Ⅲ 調査結果と考察

1)聞き取り内容

a)インフォーマント①

ゲート通りにて商店を営むAさんは70代後半の男性である。県外出身であるが、終戦直後、10代の頃にコザに越してきた。基地内で働いた後、転職を経て現在の店舗を構えて35年になる。戦争特需の時代は、「とにかく景気がよかった」「アメ横のお店の人がこちらに商品を買付けに来たり、アメリカの街といえはここが本場だった」という。

創業以来常に米軍要員を相手に商売を続けているが、『外人さん』はいい人が多いよ。声も大きいし、悪いように見えるかもしれないけど、みんな優しい。値切らないし、すごくドライで付き合いやすい。外人と付き合い合った事がない人には分からないかもしれないけど、アメリカ人と商売をやり始めると日本人と商売はできないよ。よく外人が事件を起して、なんて言われるけど、実際に事件を起している外人はほんのちょっと。ほんのちょっとだけど新聞に載る。事件を起こす以上に、外人はいいことをたくさんしてる。浮浪者に奉仕をしたりとか。(中略)『外人さん』が暴れるのも、スナックで女の子に騙されたり、お金を使わされてタクシー代も残らなかった、とかそういう時。かわいそうだよ。いい所はみんな搾り取って、帰るお金もない。あとは知らん顔だもの。」など、『外人さん』に対して非常に友好的な姿勢であるのが印象的であった。

コザ暴動については、「いい暴動だった。」と表現した。「米兵にも沖縄の人にも、死者が1人も出なかった。当時30代だった自分も現場を目撃したけど、米兵に暴力を振るおうとする人をみんなで止めたりした。起こっても仕方ない事件だったとは思う。」と述べている。合併によりコザ市が沖縄市となることは、「いい事だと思った。復帰もありがたい事だと思った。」と言い、ゲート通りが空港通りと名前を変える事に関しては、「特に何も思わなかった」という返答であった。

「コザは『外人さん』の街で、『外人さん』がいたからやってこれた。最近『外人さん』もあまり(街に)出てこなくなって、交流がなくて寂しい。コザの悪い所は基地問題。でも基地があるから悪いんじゃない。我々は基地がなければ食べていけない。軍用地料とかね。」と述べている。

b)インフォーマント②

ゲート通りで商店に勤務するBさんは40代前半の男性である。コザで生まれ育ち、親も米軍要員を顧客対象とした店舗を営んでいた。大学進学を機に県外へ行き、就職もしたが10年程前に家庭の事情で戻ってきた。「あくまで家庭の事情で、この街が好きで戻ってきたかったというのではない」と言う。

戦争特需時代は体験しておらず、またコザ暴動の時も幼少であった為記憶にはないが、「後から映像を見たり話を聞いたりしている

と、(事件を起した軍関係者が無罪判決になるなど) 平等に扱われなかったことへの不満、『外人』への敵対心が背景にあるのではないかな、とは思いますが。自分も、未だに『外人』に対して、なにくそ、という思いはあります。」と述べた。

コザ市から沖縄市への名称の変更については「特に何も感じなかった」が、ゲート通りから空港通りへ、そして再びゲート通りへと通りの名称が変更した事に対しては、「慣れ親しんだ名前だし、「ゲート通り」の方がいいと思う。ネガティブなイメージもあるが、やはりコザは基地の街であるし、それを消さない事で街の個性としていくべき」だと言った。

c)インフォーマント③

Cさんはコザ出身の50代の男性である。かつては親がセンター通りでバーを経営しており、現在は自身も中央パークアベニューで飲食店を経営している。大学進学を機に東京へ出て就職もしたが、家庭の事情などでコザに戻り、現在の店舗を開業した。

高校時代にベトナム戦争特需を経験しており、「当時のコザを言葉で表すなら「経済力」であった」と述べる。「商売をしている人はかなりの経済力を持ってました。『一晩でドラム缶一杯のドル札』は大袈裟かもしれないけど、ダンボール一杯には貯まったんじゃないかな。それをこう、上から足で踏んで(押し込めて)、また上からお札を入れて。『外人』が持ってる札束は分厚すぎて折り曲げられないんですよ。だから巻いてポケットに入れて来る。それを一晩で使ってしまいうんですよ。自分も高校の入学祝いにはスイス製の時計、万年筆、革靴を買ってもらったりしました。(中略) ジュークボックスで外国の音楽を聴いて、ラジオからは日本の歌謡曲が流れてましたね。そういう部分ではコザは特別な場所だったんじゃないかなーとは思いますが。『外人』のファッションを見ていたからこの通りで育った人はおしゃれでしたよ。自分も高校生の時からシャツのボタン直しをテーラーに持ち込んだりしてしていましたね。」などの当時のエピソードを聞く事ができた。

現在のコザ、特に中央パークアベニューは衰退が激しいが、「店舗の定着が厳しくて、空き店舗が多い。『外人』のお客さんも来るけど、購買力がなく、あまりお金は使わない。これからは『外人』だけでなく観光客を呼び込めるように、この通りの景観や環境を生

かして、他にないものを作り出していきたい」と考えている。また、「『外人』がいて、街に溶け込んでいることがコザらしさである」と述べており、「好きで基地があるわけではないから、ある以上はそれを利用して生きていくしかない」というスタンスの上から、コザの地域性を「基地の街」に位置づけている事が伺えた。

d)インフォーマント④

Dさんは50代後半のコザ出身の会社員の男性で、親がセンター通りでバーを経営していた。大学進学で東京へ出たが、その後家庭の事情でコザへ帰り、就職した。

Dさんもまたセンター通りで育ち、戦争特需時代を経験している。当時の街の様子について、「学校の先生が、「センター通りには（怖くて）行けなかった」と言ってたけど、自分達はそこで育って、『外人』がいたのが当たり前なので気づかなかった。外から見たらそういうものなのかなー、と思った記憶がありますね」と述べていた。

コザ暴動の時は東京に住んでいた為、テレビで事件を知ったが、「『外人』向けの商売をしている中で、『外人』との軋轢は確かにあった。県内の中でも我々の置かれている環境は特殊であったし、しかし彼らの味方という訳ではないが、そういう環境で育って、我々もそれで稼いだお金で東京（の大学）まで出して貰えたという思いがあったから、どうしてこんな（騒動が）大きくなるのかなあとと思った記憶がある。」と言っている。

「我々の世代では「エイサー」はあまりいいイメージは持ってないですよ。どうして今、こんなにエイサーが人気があるのかなー、と不思議に思う。地域の文化が急に出てきたというのは、価値ってというのは変わってくるのかな、と思いますけどね。特に自分達の世代でこの地域の人たちは、ロックとかカントリーとかをずっと当たり前に聞いてきたし、テレビもアメリカのドラマが入ってきていたし、アメリカという国に憧れを持っていた世代だから、地元のものはださいと思っていた。大学で県外に出た時も、周りの人たちのファッションを見て、「なんでこんなださいかなー」なんて優越感を感じてました」など、当時のコザの人々がアメリカ文化に非常に近い場所に居た事が感じられるエピソードも聞く事ができた。

米軍要員に関しては、「『外人』にもいい人達はいっぱいいるし、犯罪を起すことは許せないけど、じゃあ地元の人がみんな善人かと

言うと比較はできない。この街は戦争の前からあった街ではなく、基地があったから出来た街なのだから、ある程度のリスクはあるが、（基地と）共存していくしかない、と。」と述べた。

e)インフォーマント⑤

Eさんは30代後半の男性である。中央パークアベニューで米軍要員を顧客対象とした店舗を営んでいる。コザ出身で、中央パークアベニュー周辺で育った。物心がついた頃には既に日本に復帰していたが、それでも少年期にはコザはかつての「基地の街」の賑わいをまだ持っていたという。少年時代はセンター通り周辺で遊んでおり、「銀天街⁹のアーケードがちょうど新しくなった頃で、そっちに遊びに行ったりもしたけど、『外人』もいない（道が空いている）し綺麗だったけどあんまり面白くないからすぐBC（ストリート¹⁰）に戻ってきた。子どもに悪いことをする『外人』もいなかったし、BCはいかがわしい街だったけど、いかがわしいから面白いっていう部分はあった」と当時の街について述べている。

米軍要員に関しては、「『外人』に対して悪いイメージはなかった。酔っ払ったり喧嘩してても「警察」と言えばすぐに引っ込むし、怖いと思ったこともあんまりない。寧ろフィリピン人のスナックの団体とか、フィリピンの方がイメージが悪かった。ただ湾岸戦争の帰還兵は戦争後遺症で精神を病んだ人も居て、殺人が起こったりしていたから、その時はさすがに怖いと思ったけど、それくらい。」と言う。

Eさんが中学生の時にセンター通りから中央パークアベニューへの改装が行われたが、「街が変わる事は嫌だったよ。ゲート通りもそうだけど、BCは日本じゃない。そこが魅力だった。パーク（アベニュー）は没个性的で魅力がない。」と述べた。

他にも、「コザを音楽の街と思ったことはない。ここはあくまで、古い、いかがわしい街。自分達がバンドを始めた頃はライブハウスはこの辺にはもうなくて、他の街のライブハウスに行っていた。昔『Aサイン』という店があって、そこはすごく好きだったんだけど、今はそういうコアな店はあんまりないし、最近は行きたいと思うライブハウスもない。」と言う。

Eさんの主な顧客は米軍要員であり、常に彼らと係っている。元々は普天間基地¹¹周辺で仕事をしており、店舗を構えるにあたり

コザに戻ってきたが、「最初の頃の客層は 70%は金武のハンセン¹²。嘉手納からはあまり来なかった。マリーン（海兵隊員）は若いしバカが多いから、暴れたり酔っ払って来店する事もあったけど、嘉手納のお客が増えてきた事などもあって、最近落ち着いてきている。」など、米軍要員に関する話を聞く事が出来た。

f) インフォーマント⑥

Fさんは60代の男性で、中央パークアベニューで商店を営んでいる。コザ暴動を実際に体験した1人である。

「お店で飲んでいたら、「外で暴動が起きている」と言うので見に行っただけですよ。あちこちで車がひっくり返って火が上がっていて、異常な雰囲気だから、早く店を閉めてシャッターを閉めないとお店が焼かれるかもしれない、と通り全体の皆が言ってました。自分は巻き添えに遭って頭に怪我をしたけど、病院に行くと憲兵に見つかって捕まるというので家に帰って手当てをして、包帯を巻いている間は一步も家から出なかった。（中略）暴動の翌日からはライフルを持った兵隊さんがあちこちを歩いていて外にも出られない程の厳戒態勢で怖かった。でもオブリミッツ¹³が解けてまた『アメリカさん』が出てくるようになって元通りで、暴動の前後で街の雰囲気が変わるという事はなかった。結局、自分達にとって『アメリカさん』はお客様で、『アメリカさん』がお金を落として行ってくれるから自分達は生活が出来たんですよ。沖縄は、戦後色々な事があったが、『アメリカさん』のお陰で自分達は今日まで生活ができたと思う。」と述べている。

g) インフォーマント⑦

Gさんはゲート通りで飲食店を営む40代後半の男性である。コザ出身で、店舗は親の世代に創業されたものである。ベトナム戦争時代やコザ暴動が起こった時は小学生で、また「人通りがあまりに多かったから、表の通りでは遊ばなかった」ため、印象的な記憶はあまりない。

Gさんのお店はベトナム戦争時代は米軍要員を顧客対象としたバーであったが、Gさん自身は、「『外国人』は嫌いだ」と言う。「旅の恥は掻き捨て、みたいな所がまだあったりするし、やっぱり言葉も通じないし、彼らはこちらの文化を勉強してこないからコミュニ

ケーションも取れない。沖縄の人でも英語を喋れない人が多いし、お店のシステムを説明できずにトラブルになったりする。(通りの人は)皆、諸手を挙げて「『外国人』OK」だとは言っていない気がする。ただコミュニケーションをとれる準備をしている人なら、向こうがそういう姿勢で来るなら米兵さんが来るのもまだいいよ」と述べている。

ゲート通りから空港通りへ、そしてまたゲート通りへと改名がなされた事については、「ようやく今、歴史認識をしようとしているんじゃないかな。この街は戦後たった何十年の歴史の街だから、ちゃんとした歴史を位置づける為に、名前も固定化した方が分かりやすくっていいだろうと思うけどね。「ゲート」というカタカナの名前を残すという事は、統治下の当時があったという話がしやすくっていいと思うよ。コザは基地の街だから、基地があって統治があったという歴史をきちんと認識していくべき。」と言う。

h)その他のインフォーマント

以上の7人のインフォーマントは、なんらかの形で「基地の街コザ」を経験し、あるいはそれに係りながら生活をしてきた人々である。その他にも、そうではないがコザの街に特別な思い入れを持っている事が伺える人々の街に対する表現も以下に紹介しておきたいと思う。

Hさんは20代後半のコザ出身の男性である。職業は会社員で、両親もゲート通りやセンター通りで商売をした経験はない。

「第一世代の人たちは、自分でコザを作ってきて、『外人』とも密接に係ってきたから街に対する思い入れが違うんだろうけど、自分達は戦争も占領も復帰も知らない。コザのバックグラウンドを知らないから、コザはただの「楽しい街」。友達もたくさんいるし、いい居酒屋が多いから好きなんだよね。常にここに戻ってきたい。(街が)盛り上がればいいなとは思う。『外人』には興味がない。いてもいなくても同じ。」

Iさんは30代後半のコザ出身の会社員の男性である。Hさんと同じく、家族にも自身にも商売の経験はない。

「生まれた時からこの風景が当たり前だから、コザの何が特別かはよく分からない。物心ついた頃には既に復帰していたから、戦争や占領の事も知らないけど、コザは居心地がいいから好き。県外に

も住んだけど、やっぱり戻ってきたかった。同じ沖縄でも那覇などはゴチャゴチャしていて住みたくない」と、街に対する思い入れを語った。

2) 考察

以上のインフォーマントの言葉から読み取れるコザのイメージには二つの「差異」が存在する。一つ目は、先に述べた対外的イメージと比較した際、どちらも確かにコザの特性を表現しているにも係らず、しかしその性質に見られる明確な差異であり、二つ目が、インフォーマント間での解釈に見られる差異である。

それぞれについて以下で検証していく。

(a) 内と外での差異

観光のキーワードから見られるコザの対外的イメージは、「音楽の街」「国際交流都市」「民俗芸能のまち」といった、基地の街の下で培われた独自のコザ文化を根底に置いたものであった。

それに対し、インフォーマントによって語られるコザのイメージは、「『外人さん』の街」「『外人』が溶け込んでいる街」「基地がある街」「日本ではない街」といった表現が見られ、コザ文化という側面から街が語られる事はなかった。Eさんからは、「コザを音楽の街と思った事はない。」といった発言も見られている。

また、米軍要員の捉え方に関しては、AさんやDさん、Fさんは、「『外人さん』はいい人が多い」(Aさん)「『アメリカさん』のお陰で自分達は生活をしてこれた」(Fさん)と、『外人さん』に対して友好的な姿勢が一番に来ており、また「最近は交流が少なくて寂しい」などという言葉がみられた。これに対しBさんやGさんは「未だになにくそ、という思いはある」(Bさん)「嫌いである」(Gさん)と言い、Eさんは「悪いイメージはない」と言うが例えば海兵隊を「バカが多い」と言うなど、友好的とは言い難い表現が見られ、彼らをただ商売相手としてのみ見ている部分が強い。Cさんからは、直接米軍要員に対する解釈を聞き取る事は出来なかったが、コザの街を「外人がいる事が街の特色」であり、「基地を利用していく」と発言している事からも、友好的というより利用対象と捉えている部分が強いのではないかという印象を受ける。最後にHさん、Iさんは米軍要員に対して無関心であり、彼らにとっては全くの他者であ

る。

以上をまとめると、「友好的」「非友好的」「無関心」という3つのスタンスが見えてくる。「無関心」を除く二つのスタンスは、形こそ違えど基本的には生活の上で米軍要員との切っても切り離せない関係性を示している。これに対し対外的イメージとしての米軍要員は、時には「国際交流の対象」であり、或いは単なる「異国情緒」のアイコンである。

街のイメージと米軍要員へのスタンスにおける対外と内在の差異は何によってもたらされるかと言うとそれは言うまでもなく、「基地が常にある現実」と「統治の記憶」である。

また、第一章でも触れたように、コザは1980年代まで基地関係者との商売による経済がなにより重要視されており、観光産業を全く度外視していた為、「音楽」や「国際交流」「伝統芸能」といった文化を地域資源として外部へアピールしようという動きはなかったと考えてもよい。

つまりそれまでのコザとはあくまで「基地の街」以外の何者でもなく、「基地の街の記憶」の中に地域資源としてのコザ文化という地域解釈は存在しなかったのである。

では観光による地域のイメージとは、地域解釈にまったく結びつかないものであるのかというところとは言い切れない。

太田(1993)によると、文化は観光の下で、観光客のニーズに対応したイメージに集約され、変容し、またそうして生成されたイメージがその地域の住民のアイデンティティの再構成に結びつくのだという。

実際沖縄市においても、近年、コザミュージックタウン音市場を始めとする「音楽による町づくり」に参画すべく、周辺商店街においてロックやジャズ、フォークなどの音楽に関連したイベントが多数開催されており、「音楽の街コザ」のイメージに対する住民の意識が高まりつつあると感じられる。

(b)内側での差異

次に、インフォーマント間で見られる表現の差異について検証する。

まず街の解釈の表現であるが、AさんやFさんによる『『外人さん』の街』という表現と、Cさんによる『『外人』が溶け込んでい

る街」という表現は、一見類似しているが同じ解釈を含んでいるとは言いがたい。Cさんの発言の後に続く「好きで基地があるわけではないから、ある以上はそれを利用して生きていくしかない」という言葉からも読み取れるように、AさんやFさんの表現が基地依存の名残を残した上での言葉であるのに対し、Cさんの解釈は基地を街の個性として利用してゆくという考えの上での「『外人』がいる街」という解釈であると考えられる。

これについてはDさん、Bさん、Gさんも同様に、「コザ＝基地がある街」という表現をしている。

また、Eさんによる「いかがわしい街」「日本ではない街」は現在ではなく過去のコザを表した言葉であるが、当時のコザの地域個性を大きく反映した言葉であり、「『外人さん』の街」「基地がある街」とはまた更に異なった解釈を含んでいると考えられる。

Hさん、Iさんによる「楽しい街」「好きな街」という表現も、上記の3つの分類と全く異なっている。

米軍要員の捉え方に関しては、上記で分類した「友好的」「非友好的」「無関心」の3つのスタンスを再び用いる。

以上をまとめると、街に対する解釈と米軍要員の捉え方は大きく分けてそれぞれ4分類と3分類に分ける事ができる。

これらの分類間の差異が何によってもたらされるのかをこれから明らかにしたいと思うが、その際に大きな鍵となるのが、インフォーマントの年齢である。

年代	時代背景	インフォーマント	街の解釈	米軍要員
1940 以前	沖縄戦	Aさん、Fさん	『外人さん』の街	友好的 (『アメリカさん』、『外人さん』)
1950	コザ市発足	Dさん	基地がある街 『外人』が溶け 込んでいる街	非友好的 (『外人』『外国人』)
		Cさん		
1960	ベトナム戦争	Bさん、Gさん		
1970	コザ暴動・復帰・ 市町村合併	Eさん	いかがわしい街 日本ではない街	
		Iさん	楽しい街	無関心
1980		Hさん	好きな街	(『外人』)

【表 2】 インフォーマントの年齢・年代と時代背景

上の表は「基地の街コザ」の時代背景とインフォーマントの生まれた年代を照らし合わせたものであるが、これを見るとインフォーマントの年齢層によってそれぞれの分類がある程度明確に分かれている事が分かる。

AさんとFさんの年齢は近くはないが、彼らを一つの年代として括った理由は、彼らが戦後自ら店舗を創業し、「基地の街コザ」を作り上げてきた同じ「第一世代」であるからである。彼らは街のイメージや米軍要員に対する捉え方も大変類似している。

また、Dさん、Cさん、Bさん、Gさんも年代は異なるが、第一世代の息子世代である「第二世代」に当たるという点で共通している。実際、彼ら4人全員の親がゲート通りやセンター通りで飲食店や商店を創業・経営していた事は聞き取りから明らかになっている。

ただしEさん以下の人々に関しては年齢的には第二世代の息子世代に当たるが、彼らの親が米軍要員相手の商売をしていた経験はなく、実際の息子世代とは言えないので第三世代という括り方はできない。

この表から、街に対するイメージと米軍要員の捉え方は大まかには年代・世代で差異が出るという事が読み取れるが、細かな部分ではそれだけでは説明のつかない差異が現れている。その要因として、個人の生育環境や生業による影響が挙げられる。例えばDさんは

他の第二世代の人とは異なり、米軍要員に対しやや友好的な発言をしているが、これは D さんが第二世代の中で唯一、職業が会社員であり、商売という形で米軍要員に係った経験がない事に起因しているのではないかと考えられる。

また、E さんと I さんは、どちらも親が米軍要員を顧客とした商売をしていた経験はなく、また同年代であるにも係らず、両者の街の解釈と米軍要員の捉え方が異なるのは、E さんが中央パークアベニューで育ち、現在の生業が米軍要員を顧客対象としているという点に説明を求める事が出来る。

以上から、年代に加えて生育環境や生業などによって街の解釈・米軍要員に対する解釈に差異が出る事が明らかになったが、では年代によって街の解釈と米軍要員の捉え方が違うのはなぜか。I さん、H さんの立場がそれを紐解くヒントとなっている。I さん、H さんの街へのイメージ「楽しい街」「居心地のいい街」と米軍要員に対する関係性の希薄さは、前出の観光イメージにおける街と米軍要員への解釈と類似している。

この両者に共通して言えるのは、「基地の街の記憶」の希薄さである。I さんも H さんも、親の世代が商売を営んでいた経歴はなく、またコザ市出身ではあるが E さんのようにゲート通りや中央パークアベニューといった「基地の街の中心」で育っていない。特に H さんは 20 代であるので、「基地の街の記憶」は全くないに等しく、自身の「コザのバックグラウンドを知らないから、コザはただの「楽しい街」である」という言葉が示す通りであると言える。

つまり「基地の街の記憶」の濃度が、街への解釈に係っているのではないかと考えられるのである。

A さん・F さんの「第一世代」は自らが基地の街を作り上げてきた第一人者であるので、「基地の街の記憶」が最も濃厚であり、コザが最も基地の街であった頃に近い形で街を解釈し、米軍要員との関係性を築いている。

その下の「第二世代」の D さん・C さん・B さん・G さんはその次に「基地の街の記憶」を有している世代であり、日本復帰や街の衰退に第一線で立会い、変革を迫られてきた世代の人々である。

また、幼少期から基地の街の中心地で育った E さんにも「基地の街の記憶」は残っている。この「記憶」が、同年代である I さんに比べ、E さんを「日本ではない街」「いかがわしい街」といった、

「基地の街」の側面の強い解釈に導いていると考えられる。

その一方で、HさんやIさんのような20代から30代の人達の間では、「コザへの思い入れ」が他の世代の人々とは明らかな違いを見せている。

先にも述べたように、彼らには「基地の街の記憶」がほとんどないが、この世代の人々の多くが「この街が好きだ」「ここにしか住みたくない」といった強い愛着を街に対して持っている。HさんとIさんの他にも、この世代に関してはあと2人のインフォーマントから聞き取りを行ったが、彼ら4人全員が「この街が好きである」と発言し、Iさんは一度県外で就職しているが、「沖縄ではなく、コザに戻ってきたかった」と言い、実際に戻ってきているのである。

第二世代には、戦争特需で潤った経済環境で県外の大学へ進学し、そこで就職する人が少なくない。今回の第二世代のインフォーマントの中でも4人中3人が県外へ進学しており、そのうち2人は一時は就職もしている。しかし彼らがコザへ戻ってきた理由は、全員が「家庭的な事情」であり、Bさんからは「コザの街が好きだから、という理由ではない」という発言も見られている。

街に対するここまでの思い入れの違いというのは何によるものか。それは、「基地の街の記憶」がない、という事が重要な意味を持っていると思われる。インフォーマントの言葉にある「居心地がいいから好き」「いい居酒屋が多い」という表現からは街の雰囲気そのものに対する愛着を読み取る事ができる。「基地の街の記憶」を持たない彼らは、基地の街であることに対してマイナスイメージをあまり持っていない故に、純粹に街に対して思い入れを持つことができているのではないだろうか。

以上のことから、人々の地域に対する解釈と「基地の街の記憶」の間には大きな関連性が見られる事が明らかになったが、「記憶」と「場所の地域性」との関連を示すものとしてもう一つの事例を以下で取り上げたいと思う。

3) 記憶を残した通り／消そうとした通り

第一章でも触れたように、「コザゲート通り」と「センター通り」は、基地の街コザの全盛期の中心となった場所であった。しかし現在はと言うと、ゲート通りは週末の夜にもなれば未だ多くの米軍要員が行き交い、比較的賑わいを見せているが、これに対しセンター

通りの後身である中央パークアベニューは空き店舗が目立ち、人通りも多くなく、ゲート通りとは対照的な印象を受ける。かつては同じように「基地の街」としての役割を担ってきた二つの通りにこれほどの差異を齎したものが何であるか。それはそれぞれの通りが行った「改名」あるいは「改装」に関係するという事が聞き取り調査を行う内に明らかになった。

ゲート通りは 1972 年に「空港通り」という新たな通り名を打ち出し、一時は「コザゲート通り」と「空港通り」という二つの道路標識が掲げられていたが、2005 年に再び通り名を「コザゲート通り」へと統一し、センター通りは 1985 年にアーケードの敷設と「中央パークアベニュー」への改名を行った。

ゲート通りが「空港通り」へと、そしてまた「コザゲート通り」へと改名を行った経緯は、日本復帰がなされた 1972 年に、このまま将来的に基地はなくなり、そうなれば嘉手納飛行場の滑走路は国際空港として利用されるだろうという、将来への展望を込めたものであったという事が通り会関係者からの聞き取りで明らかになった。

しかしそのまま基地は返還されず、通り会は最終的には「基地の街」という通りの個性を髣髴とさせる「ゲート通り」という名前を復活させた。

これに対しセンター通りは、日本復帰後、円の高騰に伴い米軍要員の足取りが減り、空き店舗が目立つようになった事を受けて基地経済からの脱却を目指した。「怖い」「危険」といった、かつての「基地の街」の持つネガティブなイメージを一掃し、クリーンな通りを作る事で県内・県外の購買層を獲得しようという計画の下、アーケードの敷設を行い、「中央パークアベニュー」として全く新しい通りへと生まれ変わったのである。

以上の軌跡を踏まえて二つの通りを比較した際、大きく異なるのは、通りという場所に宿る「基地の街の記憶」の有無であると言える。ゲート通りは現在も「基地の街」としての顔を持ち続け、また異国情緒やチャンプルー文化といったものを求めて多くの観光客が訪れている事からも、「基地の街」が確固とした地域個性として定着している事が伺える。

しかし中央パークアベニューにおいては、改装により「基地の街」の面影を消し去る事でかつてのネガティブな街のイメージは取り

除かれたが、同時に街の個性までもが失われてしまった。モータリゼーションへの対応の遅れや、郊外型大店舗に囲まれた立地では没个性的な商店街が生き残る事は難しく、改装直後こそ賑わいを見せたものの、再び客足が落ち込み、現在に至っているのが現状である。

「基地の街の記憶」が場所の地域個性に強く結びついており、その地域個性こそがコザの街の資源となっている事が以上の事例から分かる。

IV おわりに

コザの対外的なイメージと内在的な解釈の間の差異と、インフォーマントの内在的解釈の間での差異。そして、ゲート通りと中央パークアベニューの「変革」。以上の3つから、コザの地域個性と地域解釈と「基地の街の記憶」の関わりを見てきた。コザに住む人々の言語表象において、地域解釈は主に年代・世代を中心として幾つかに分類され、それは人々の持つ「基地の街の記憶」の濃淡に由来している事が本研究で明らかとなった。

戦後50年で成立・発展したコザにとって、インフォーマントによって語られる「基地の街の記憶」は、コザの歴史そのものである。しかし現在のコザではその「基地の街の記憶」ですら世代が移るにつれ希薄化し、次第に失われようとしている事も、調査結果から明らかになっている。冒頭で、「基地の街であるということ」がコザの地域個性そのものであると述べたが、コザには「基地の街であるということ」以外の選択肢があまりにも少ない。それは、基地によって生まれ、基地によって育った「基地の街コザ」の悲劇である。だからこそコザにとって「基地の街」という地域アイデンティティは重要な意味を持つのである。

そのためにも「基地の街の記憶」を媒介として地域解釈を再定義し、「基地の街」としての地域個性を再評価することは必要不可欠であり、この「基地の街の記憶」をどう保持していくかが、コザの街の再生に際しての課題になるだろう。

そんな中で観光の下における「コザ文化」という新たな切口からの基地の街の再評価は、新たな「基地の街コザ」の形を生み出す動きであるとも言え、今後期待されると考えられる。

謝辞

本論文を製作するに当たり、貴重なお時間を割いて聞き取り調査に協力して下さったインフォーマントの方々、沖縄市役所、沖縄市観光協会、沖縄市一番街商店街振興組合、サンシティ商店街振興組合、コザゲート通り会、コザ商店街連合会の方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

注釈：

- 1 ヒストリートは資料館としての役割を果たすと同時に、人々の足を商店街に向けようという試みの下、ゲート通りと中央パークアベニューの間に位置する商店街「パルミラ通り」において空き店舗を利用して開設されている。
- 2 2008年12月時点。沖縄市ホームページより抜粋
- 3 沖縄市観光情報サイトより抜粋
- 4 「コザ暴動」（「コザ騒動」）は、1970年12月10日、コザ市内で、米兵の運転する自動車が沖縄の男性をはねた交通事故を契機に発生した事件である。当時、米軍車両による交通事故が多発し、またそれらの事故の一方的処理、米兵の無罪判決が相次いでいた。この時もMP（憲兵）が事故を隠蔽するかのように見えた周りの群衆の怒りが高まり、MPカーを横転させ、火を点けた。その後も群衆の怒りは収まらず、約1キロの軍道やゲート通りを巡って次々に米軍車両を横転させ、火を点け、火炎瓶や石を投げつけ、基地内に逃げ込んだ兵士を追って基地内に入り、施設にも火を点けた。最大時には約5000人の群衆が暴動に加わり、70台以上の車両が炎上したという。（沖縄市1999）
- 5 正式名称は「ビジネスセンター通り」であるが、「センター通り」と略して呼称される事が多い。
- 6 サンエーは沖縄県で店舗展開するスーパーマーケットである。「ハンビータウン」は、中頭郡北谷町の米軍施設「キャンプ瑞慶覧」内に存在した「ハンビー飛行場」の返還跡地に建設された、サンエーの郊外型GMS店舗。
- 7 美浜タウンリゾート・アメリカンビレッジ。沖縄市の西隣に位置する中頭郡北谷町美浜に建設されたリゾート地区。アメリカ西海岸の街を模倣した異国情緒溢れる風景を持ち、またショッピングモール、シネマコンプレックス、ライブハウス、リゾートホテルなどが立ち並んだ、レジャーとショッピングが同時に楽しめる大

-
- 規模アミューズメント施設として県内外から多くの観光客が訪れる人気観光スポットとなっている。米軍施設「キャンプ瑞慶覧」内のメイモスカラー射撃場の返還跡地開発によって建設された。
- 8 コザを中心に沖縄で発展した独自のロック・ミュージックの総称。
 - 9 銀天街商店街。沖縄市内のコザ十字路にある商店街で、地元住民を顧客対象とした商店が軒を連ねている。1978年にアーケードの改装が行われている。
 - 10 BCストリートはセンター通りの別称で、「Business Center Street」の略である。主に米軍要員によって使われていた呼称である。
 - 11 普天間飛行場。沖縄県宜野湾市に存在する米軍基地。
 - 12 沖縄県金武町にある米軍施設キャンプ・ハンセンを指す。同施設は海兵隊の訓練基地であり、実弾射撃演習が行われている。
 - 13 米軍によって発令される、米軍人・軍属・家族が民間地域へ出入りすることを禁止する指令。米軍と住民のトラブルの回避や性病の規制など様々な目的で発令された。なお、Fさんの話ではコザ暴動の翌日にオフリミッツが発令されたと言われていたが、実際にこの時に発令されたのは更に厳しい規制である「コンディション・グリーン」である。

参考文献：

- 太田好信（1993）：文化の客体化—観光をとおした文化とアイデンティティの創造—。民族学研究，57(4)，383—410。
- 沖縄市（2006）『コザミュージックタウン音市場事業概要』パンフレット
- 沖縄市企画部平和文化振興課(1999)：『米国が見たコザ暴動』那覇出版社。
- 沖縄市観光協会（2006）『マングラズマガジン』vol.26
- 沖縄市観光協会（2007）『マングラズマガジン』vol.27、vol.29
- 沖縄市観光協会（2008）『マングラズマガジン』vol.30
- 沖縄市建設部振興開発室中の町再開発課（2006）『中の町・ミュージックタウン整備事業』パンフレット
- コザ市（1974）『コザ市史』帝国地方行政学会
- 独立行政法人都市再生機構（2006）『中の町A地区第一種市街地再開発事業』パンフレット
- 波平勇夫（2006）：戦後沖縄都市の発展と展開 —コザ市にみる植民地都市の軌道—。沖縄国際大学総合学術研究紀要，9(2)，23-60。

参考 URL

沖縄県企画部統計課 統計資料閲覧室

<http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/index.html>

沖縄市役所 ホームページ

<http://www.city.okinawa.okinawa.jp>

沖縄市文化観光課 ホームページ「沖縄市観光情報サイト」

<http://www.koza.ne.jp/>

沖縄県立図書館ホームページ

<http://www.library.pref.okinawa.jp/index.html>

(20,185 字)